シリーズ――3 ことばと耕

方言変化の自律と介入――革新ダラと保守ズラ

ことばから「ルネッサ」を考察してきたシリーズの最終章。方言研究の新たな地平を切り開き、ことばの「耕」を行ってきた著者がその研究の中心をなす「ダラ」と「ズラ」の方言分布を例に挙げ自然な変化と、それを阻止しようとする方言における「耕」的流れを解説。さらにその先の革新と保守という経済との関係性にも言及する。

大西拓一郎
Onishi Takuichiro

おおにし・たくいちろう
1963年生まれ。方言学者。現在、国立国語研究所教授。おもな著書に、『ことばの地理学』（大修館書店）、『現代方言の世界』『新日本言語地図』『空間と時間の中の方言』（いずれも朝倉書店）など。

■リフレインに並んでるズラ

「ちゃっきり節」という民謡がある。民謡といっても、古くから、受け継がれてきた曲ではない。静岡電鉄が、宣伝歌として、北原白秋に作詞を依頼した新民謡である。

『白秋全集』30「歌謡集2」収載の「ちゃっきり節」（9～14頁）は17番まであり、各番の末尾は「ちゃっきりちゃっきり、ちゃっきりよ、きやアるが啼くんて雨づらよ。」が囃子詞として、繰り返される。

全集は『北原白秋地方民謡集』（1931年、博文館）を出典とする。解説にあたる「後記」によると、この囃子詞の後半は発表媒体により「きゃアるが啼くから雨づらよ。」や「きゃアるが啼くんで雨づらよ。」のような異同があるとされる。いずれにおいても末尾の「雨づらよ。」は変わらない。

同全集付録の月報30には浅野健二氏による『「ちゃっきり節」考』が掲載されている。それによると、戦後、ビクター専属の歌手、市丸のレコードにより全国に広く普及し、昭和32（1957）年の静岡県主催の国体では踊りも披露され、静岡県を代表する民謡になったらしい。

50代半ばの私もどこかで耳にしたことがある（ただし、関西で生育したため、似て非なる「ちゃっきり娘」と混線している可能性は否定できない）。年長の方々には、なじまれているのではないだろうか。

とりわけ耳に残るのは、やはりこの囃子詞のフレーズであろう。記したとおり、いくつかのバージョンがあるが、「雨ズラ」は変わらない。この「ちゃっきり節」の定着と県民に親しまれることを通して、ズラは静岡県を代表することばになったことは想像に難くない。

30年くらい前になるが、大井川上流に方言調査に行った。その帰途、静岡駅で売られている土産物に「そうずらまんじゅう」を見つけた。買ったことは覚えているものの、味の記憶はないところからすると、普通においしかったと想像する。味はさておき、土産物の命名素材になるくらい、ズラは地域のアイデンティティをともなう代表的方言としての地位を獲得するに至ったということだ。

ズラが使われるのは、静岡県に限らない。山梨県、長野県（北部を除く）、愛知県の一部も該当する。都道府県別に代表方言を掲げるユニークな方言辞典『全国方言小辞典』やその改訂版にあたる『全国方言辞典』では、愛知県を除き、ズラが取り上げられている。中部地方を代表する方言と言えるだろう。

■ズラって何ズラ？

ズラは推量を意味する助動詞である。標準語に訳すと「だろう」である。したがって、「雨ズラ」は「雨だろう」を表すことになる。

ズラは、基本的に体言（名詞）相当の語に接続する。「雨」は名詞だから、「雨ズラ」は典型的な使い方である。「雪」も「星」も「大阪ガス」も「CEL（セル）」も体言（名詞）なので、「雪ズラ」「星ズラ」「大阪ガスズラ」「CELズラ」はいずれも使い方として問題ない。

それでは、体言以外の動詞や形容詞など用言の推量は、どのように表すのか。

その場合は、ラが用意されている。動詞の「行く」、形容詞の「高い」の推量は「行くラ」「高いラ」となり、それぞれ「行くだろう」「高いだろう」を表す。

読者の中にズラを使う人がいらっしゃると、ここで疑問を抱かれるかもしれない。「行くズラ」「高いズラ」も使うぞ、この著者は間違っている！……あるいは控えめな方だと、「行くズラ」「高いズラ」と言える自分のズラはどこか変なのだろうかと、心細くなられることが懸念される。

心配はいらない。私もあなたも誤っていない。「行くズラ」「高いズラ」は、確実に存在する。ただし、「行くラ」「高いラ」と「行くズラ」「高いズラ」は異なる。「行くラ」「高いラ」の「行く」「高い」は、そのまま「行く」「高い」を表している。それに対し、「行くズラ」「高いズラ」の「行く」「高い」は、「行くの」「高いの」を表す。したがって、「行くラ」「高いラ」は「行くだろう」「高いだろう」を表すのに対し、「行くズラ」「高いズラ」は「行くのだろう」「高いのだろう」を意味することになる。「の」の有無に注意してもらいたい。

上にズラは「体言（名詞）相当の語に接続する」として、わざわざ「相当」を補っている。用言である動詞や形容詞であっても、「～の」のような体言相当の意味を表す場合は、ズラが接続できるのである。このような用言の用法は「準体法」と呼ばれる。ズラの前に来る準体法の形は、表面上は動詞・形容詞の終止形（言い切る形）と区別がないが、文法上は連体形に該当する活用形である。

準体法にこれ以上立ち入ると、長くなってしまう。拙著『ことばの地理学』第7章で、もう少し詳しく説明しているので、関心をお持ちの方はお読みいただければ幸いである。

■ズラは不規則

「だろう」（推量）を表すズラとラについて、整理しておこう。

動詞・名詞などの品詞ごとに、終止形（言い切る形）と推量形を上下に並べると次のようになる。これが伝統的なズラの使い方である。

	終止形	推量形
動詞	行く	行くラ
形容詞	高い	高いラ
名詞	雨だ	雨ズラ

動詞・形容詞は、終止形にラを付けるだけで推量形を作ることができる。ところが、名詞は「だ」をズに変えて、ラを付けることが必要である。つまり、品詞によって作り方が違うという面倒な手続きをとらなければならない。しかも、「だ」から置き換わるズは、それだけを取り上げると意味不明であり、実際、研究者の間でも起源をめぐって、諸説があったくらいである（なお、この起源についても上に挙げた拙著に示している）。

これを次のように改革すれば、すべて終止形にラを付けるだけで、推量形が作られることになる。

	終止形	推量形
動詞	行く	行くラ
形容詞	高い	高いラ
名詞	雨だ	雨だラ

すなわち、ズラを捨て去り、ダラにしてしまうという抜本的改革である。

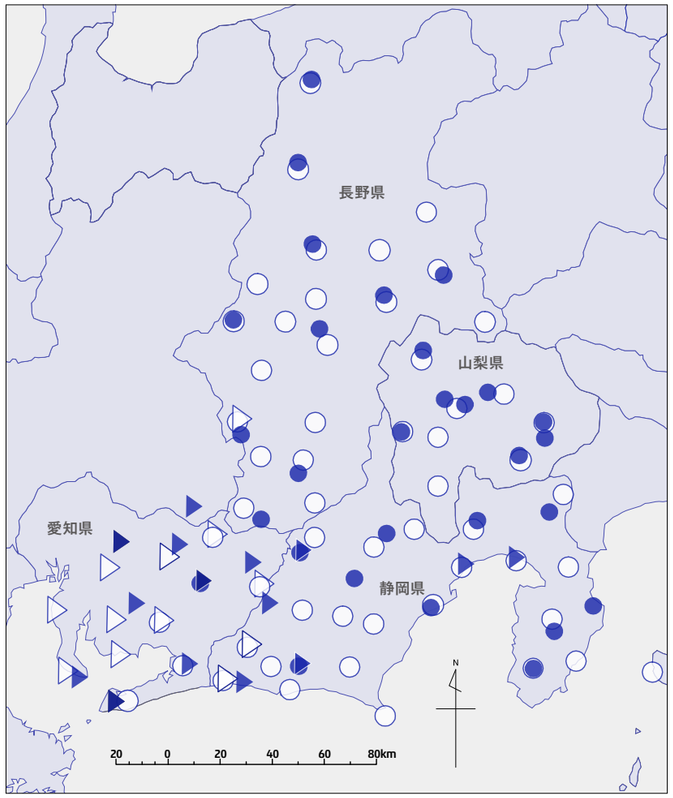
そもそも伝統型の名詞で要求される「だ」→ズの置き換えは、その背景もわからず、何とも理不尽である。そのような理解不能な要素が含まれている点においても伝統型は、システムとしてバランスを欠き、改革型の方がスマートなことは明らかだ。

■ズラからダラへ

この改革は、机上の論ではなく、現実に起こっていることである。そのことを次頁の地図（図）に示した。地図では「雨だろう」「先生だろう」のような「名詞＋だろう」の「だろう」を「名詞述語推量辞」として扱っている。1980年代の分布状況を『方言文法全国地図』（GAJ）に基づき、その30年後の2010年代、つまり現在の分布状況を『新日本言語地図』のための調査（FPJD）に基づいて、重ね合わせて示している。

80年代には、愛知県でも、東側の三河地方でズラが使われていたが、現在は衰退が著しく、ほぼ全域でダラが用いられるようになった。先に挙げ

■図：中部地方におけるズラとダラの分布変化



名詞述語推量辞

1980年代（GAJによる）　○―ズラ　▷―ダラ

2010年代(FPJDによる)　●―ズラ　▶―ダラ

た『全国方言小辞典』『全国方言辞典』の愛知県でズラが挙げられていないのは、このことを反映しているのかもしれない。80年代の静岡県ではダラはほとんど使われていなかったが、現在は散見され、伊豆半島西側の付け根のあたり、駿河湾北部ではズラからダラに置き換わっている。静岡県のズラは代表の座から降りようとしているのかもしれない。5年前（2013年）、静岡大学で学会が開催された際に静岡駅で「そうずらまんじゅう」を探したが、見当たらなかった（ただし、検索すると別のところで、引き続き売られているようである）。

一方で、山梨県、長野県ではズラが保持されており、ダラはほとんど使われていない。

■阻止されたダラ

上條馨という方が1954年に上梓された『づら考――その成立の由来と、分布』という文献がある。御崎神社社務所からの刊行ということになっているが、実質的には私家版であり、一般には入手困難な稀覯（きこう）書である。著者の上條氏は、山梨県を代表する甲府第一高校で教鞭を執られ、同校校歌の作詞者としても知られるが、若くして急逝されたらしい。同書に次の一節がある。

「山梨でのダラは、ズラをつかい馴れている類推から、幼児、児童がなまりとして一時的に使うもので、家庭でこのダラを使うと一寸笑われたり、そんな言葉ずかいはないよ、と家族から注意されたりして、上級生となり、成人すると全くつかわなくなる。」（17頁、表記は原文のママ）

地図には、80年代も2010年代も調査時に70歳以上の方が回答されたことばを挙げており、山梨にはダラがない。しかし、その方々も幼少の頃には、ダラをちょっと使いかけたのかもしれない。しかし、子どもたちの改革は、大人たちに阻止され、結局はズラが堅持された。長野県でも1960年代に諏訪地方の高校生たちが作成した『諏訪方言集――長野県諏訪地方』にダラが痕跡を残している。

■ことばの保守と革新

ズラからダラへの改革は、言語のシステムとしての整合性を高める自律的で自然な言語変化である。愛知県と静岡県（一部）では、革新方言ダラへの変化が進行した。ところが、山梨県と長野県では、改革の芽はあったものの、保守方言ズラが保持された。自然な言語変化（革新）が、そのまま広く導入されるわけではない。方言がその本質、すなわち言語として、地域の意思疎通の道具であるかぎり、変化に介入して、拡大が阻止されることもある。どのような場合に、言語変化が革新として展開するのか、あるいは反対にそれが保守により阻止（その結果、元の状態が保持）されるのかは、明確ではない。背景に地域やコミュニティ内のつながりのありかたが働いている可能性は想像されるものの、それを客観化する手立ては見いだせていない。

浅薄な知識に依ることにはなるが、経済学では、保守＝市場主義に対し、革新＝市場介入という図式があるらしい。言語の保守と革新は図式が逆転していることになり、興味深い。

なお、市場主義による言語の改革は、ここで扱った「推量の助動詞」の事例も示すように文法においては完成に時間がかかるらしい。よく知られる事例は、可能を表す「見れる」（見ることができる）「起きれる」（起きることができる）のような「ら抜き」である。

「～することができる」を意味する動詞の可能形を作るには二つ方法がある。一つは、助動詞「れる」「られる」を動詞に付ける方法である。もう一つは、可能動詞を作る方法である。

可能動詞とは、「読める」「乗れる」などである。これらは、特段、問題にされることはない。このような可能動詞を作ることができるのは、「読む」「乗る」のような五段活用の動詞に限られる。「見る」「起きる」のような一段活用の動詞から、五段活用にならって可能動詞を作ると次のようになる。

		助動詞	可能動詞
五段活用	読む ⬇	読まれる	読める
〃	乗る ⬇	乗られる	乗れる
一段活用	見る ⬇	見られる	見れる
〃	起きる ⬇	起きられる	起きれる

作れないことはないが、可能動詞は、五段活用に限定されるため、一段活用に生み出される「見れる」「起きれる」のような形は、イレギュラーとされる。これが「ら抜き」である。助動詞による形（見られる・起きられる）から「ら」を抜いた形にあたることがわかるだろう。「ら抜き」と呼ばれる所以である。ちなみに「乗れる」は「ら抜き」に対応するが、五段活用なので「ら抜き」ではない。「乗れる」のような「ら抜き」に類似した「ら抜き」ではない可能動詞が存在するから、一段活用にイレギュラーな可能動詞である「ら抜き」が生み出されるのである。

五段活用、一段活用というのは、活用による語形変化の分類である。あくまでも形のことなので、動詞自体の意味は関与しない。すなわち、「ら抜き」の存否は、意味とは無関係なのである。

助動詞による可能形（読まれる・乗られる・見られる・起きられる）は、受身形と同形である。可能動詞は、受身形と区別できる点で便利な形である。このように考えると、活用にかかわりなく、可能を独立して表すことができる点において、可能動詞を基盤とする「ら抜き」は合理性を持ち合わせていることが理解されるだろう。それにもかかわらず、一段活用の可能動詞形は「ら抜き」というレッテルが貼られてしまう。

「ら抜き」は、昭和30年代からすでに問題になっていたことが知られているが、書きことばとしては、いまだ確立を見ない。私が今、原稿を書いているパソコンソフトは、「見れる」「起きれる」と入力するたびにしつこく警告を与えてくれて、うるさい。

合理的な文法改革は、市場に適うはずなのに、萌芽から50年以上経っても公の場に立つことが許されない。このような点にも、言語は、社会現象と同様には扱えないことが現れている。つまり、ことばの「耕」は、いかに理に適ったものであっても、すぐに「功」を奏するわけでない。それは、ことばには、基本的に不文律でありながらも、意思疎通の道具として、高い共有性が求められることが働くためである。つまり、変化の自由度は低く、常に制限が課せられてしまうのである。

しかし、それでも変化は起こる。それは、連続的、直線的に進行するものではないだろうことは、想像に難くない。直感的に表すなら、ジリジリ、ドッカンである。そのような変化を基盤にして、方言は形成されてきたものと考えられる。

ジリジリが「耕」なら、ドッカンは開花・結実かもしれない。そう考えると、ことばの変化や方言の発生には、伝統的生業と類似点がないわけではない。ただし、ドッカンまでの間が長く、かつ、なかなか表面化しない。むしろ、蝉を思わせる。ことばは、植物よりも虫に近いのかもしれない。

参考文献

『ちゃっきり節』考」『白秋全集月報』30（浅野健二、1987年、岩波書店）

『ことばの地理学――方言はなぜそこにあるのか』（大西拓一郎、2016年、大修館書店）

『新日本言語地図――分布図で見渡す方言の世界』（大西拓一郎編、2016年、朝倉書店）

『づら考――その成立の由来と、分布』（上條馨、1954年、御崎神社社務所）

『白秋全集』30「歌謡集2」（北原白秋、1987年、岩波書店）

『方言文法全国地図』第5巻（国立国語研究所、2002年、財務省印刷局）

『都道府県別 全国方言小辞典』（佐藤亮一編、2002年、三省堂）

『都道府県別 全国方言辞典』（佐藤亮一編、2009年、三省堂）

『経済学のすすめ――人文知と批判精神の復権』（佐和隆光、2016年、岩波新書）

『諏訪方言集――長野県諏訪地方』（長野県諏訪実業高等学校地歴部、1961年、長野県諏訪実業高等学校地歴部）